

国際学会報告

第7回国際中世哲学会

「終わりよければすべてよし」というが、第7回国際中世哲学会が無事終わったときに、まさきに頭に浮んだのはこの言葉だった。5年前、ボン大会の総会席上で、次の学会の開催地としてポーランドのワルシャワ、エジプトのカイロ、イスラエルのエルサレムが名乗りをあげたが、その後理事会ではワルシャワを候補地と定めて、準備が進められていた。ところが突然81年秋になって、ワルシャワでの開催は絶望的であることがわかり、(1)1年延ばしてワルシャワで開催する(2)83年モントリオール世界哲学会議とあわせて開催する(3)開催地を変更し、予定通り82年に開催する、などの可能性が検討された。その結果、事務局が置かれているルーヴァン・ラ・ヌーヴを主な会場として82年に学会を開くことにきまったのは暮もおしつまった頃であったように記憶する。

この間の経緯については事務局長であるルーヴァン大学教授のウェナン神父から詳しく伺う機会があったが、連絡のため戒厳令下のポーランドにおもむくこと自体がかなりの冒険であった上、短期間に運営委員会を軌道にのせ、ベルギー政府やユネスコから補助金を獲得し、プログラムを仕上げ、会場、宿舎を確保するなど、並々ならぬ苦勞のほどは充分察しがついた。急に開催を引き受けたものの、はたしてこれまで通りの規模で学会を開くことができるのか、大いに不安であったらしい。ところがふたをあけてみると前もって正式に参加申し込みをした者、262名、発表希望者は150名をこえ（ボン大会は参加者約500名）これならば学会としての体面を保つことができる、と喜んでおられた。

ここで学会の主な会場となったルーヴァン・ラ・ヌーヴ (Louvain-la-Neuve 以下LNと略称) を簡単に紹介しておこう。ベルギーの古都ルーヴァンに1425年創設され、エラスムスを修辞学・詩学の教授として迎えたこともある古いルーヴァン大

学、そして19世紀末以降、メルシエ枢機卿の下でトマス哲学復興の拠点となったルーヴァン大学については改めて語る必要はないが、そのルーヴァン大学が二分されてLNが創設されたいきさつは比較的知られていないように思われるからである。この分裂の背景にはフラマン語を話すベルギー北部の住民と、南部のフランス語圏住民（ワロン人）との間の1世紀以上にわたる反目の歴史があるが、1966—68年の大学紛争時に、フラマン系の過激派学生は「ワロン人掃れ」をスローガンに、フラマン語圏に属するルーヴァン（フラマン語ではLeuven）からワロン人を一掃しようと企てた。他方、ワロン人の間にもワロン文化圏に自分たちの大学を建設しようとする動きがあり、1970年7月1日をもってルーヴァン大学はそれぞれ別個の法人格をもつ二つの新しい大学（ただし総長はマリヌ・ブリュッセル大司教1人）として再出発することになった。こうして古い大学町から追い出されたワロン人の大学のために新しく建設された学園都市がLNなのである。

LNはブリュッセルの都心から南東へ約25キロ、古いルーヴァンからは南西へ約20キロのなだらかな丘陵地に位置し、全体の広さは約900ヘクタール、そのうち200ヘクタールは散策やピクニックに好適な美しいローゼルの森である。新しい町の設計理念は、高度に発達した近代科学技術の成果を充分にとりいれると同時に、中世の都市の特徴であった人間味をできるだけ残す、というもので、新しいものと古いものとの共存をはかろうとするねらいは様々のところに認められた。一例をあげると、LNの五つの街区を結ぶ自動車道路から一步、歩行者専用の小径に入ると、足もとの石畳には落葉が散りしき、木の葉がくれに12世紀の修道院の遺跡が望まれる、という具合であった。

学会に話を移すと、全体テーマに選ばれたのは「中世における人間とその世界」であり、全体集會はこのテーマを「古代および中世哲学」「13世紀ラテン哲学」「ビザンティン哲学」「中世およびルネサンス哲学」「ユダヤ哲学」「アラブ哲学」という六つの時代ないし文化圏に即して追求する、という構想であった。ボン大会では全体集會の講演者が多すぎて、それぞれのテーマを十分に展開するゆとりがなかった、という教訓を生かして、今回は講演者は一人にかぎられ、かなり活発な質疑応答も行われた。しかし全体テーマは極めて包括的であり、講演者たちは口をそろえてぼう大な問題領域を限られた時間でカバーすることの困難を訴えてい

た。

たとえば、13世紀ラテン哲学における人間とその世界というテーマを担当したオックスフォード大学ペリオール・カレッジの学寮長ケニーは「13世紀における人間の知性と心情」と題して講演したが、その内容はトマスとスコットゥスの知性および意志概念の比較であった。マスター・ケニーがトマスの形而上学については否定的な評価をしており、むしろかれの精神の哲学を高く評価していることは周知の事実であるが、この講演でもそのことははっきりと認められた。結論は、この二人のスコラ哲学者の間の相違は、デカルトとライプニッツの相違よりはるかに大きく、そのことが中世の哲学を興味深いものたらしめる、というものであった。またルネサンス学者としてわが国でも著名なコロンビア大学のクリステラー教授は、中世哲学との関係におけるルネサンス哲学に焦点をしばって報告を行ったが、この関係にふくまれる連続性と変化、類似点と相違は、到底単純な一般化を許すものではないことを強調した。たまたまクリステラー教授の講演にさいして司会役を命じられたので、打合せをかねて色々話を伺ったがいかに論争好き、議論好きの学者という感じで、講演の間も論争のほこを収めるのに苦労している様子がありありと認められた。

今回の学会の一つの特徴は、参加者の関心が全体集会よりもむしろ学会に常設されている八つの研究委員会の集會に傾いていたところにあったと思う。すくなくとも筆者が出席した「歴史的・批判的（校訂）版」「ラテン中世におけるアリストテレス註解」などのコミッション集會には参加者の大半が出席し、各地の大学や研究所で進められている研究の現状について詳細な報告がなされ、熱心な質問があいつぐという風で、おそらく学会の全体を通じて最もみのり豊かな集會ではなかったかと思う。次の学会ではこうしたコミッションの討議により積極的な姿勢で参加し、日本における研究の現況について、十分に資料を整えた上で報告すべきではなからうか、と考えた次第である。

「中世文書研究における電算機利用」に関するコミッション集會には時間の都合で出席できなかったが、この領域で現在国際的に最もめざましい仕事をしているルーヴァン・ラ・ヌーヴのトンベール教授には何度も会い、長時間討論し、研究施設も見学できたので、その一端を紹介しておきたい。トンベール教授を中心に進めら

れている仕事は、コルプス・クリスティア ノームルの最近刊行された著作に付けられている索引、トンベール夫人によるボナヴェントゥラ索引、すでに予告されているアウグスティヌス全著作の索引などによって広く知られているが、注目に値するのは中世初期からルネサンス期にいたるベルギー関係のラテン語著作、文書の全体が電算機で処理され、様々の研究目的に応じて利用されていることである。トンベール教授との会話の中で、著者が *realitas* という用語は14世紀のスコートゥスが最初に用いた、というのが通説だが……と口を滑らせたところ、教授は早速それを確めにかかり、数分後には実に12世紀の Odo 司教が神学的著作で5回この用語を用いていること、その箇所はミーニュ・ラテン教父全集160, 1060…と判明し、そのテキストのコピーをにこやかに手渡してくれた。テキストの電算機処理によって浮び上がった興味深い情報をもう一つ挙げると、ヒラリウスの『三位一体論』の全体を通じて *trinitas* という言葉は三回しか用いられていず、*sum (est)* という言葉は実に7000回（接続詞 *et* の二倍）も用いられており、わざわざ *erans* という言葉を造語までしているという。これはヒラリウスが「ある」という最も基本的な言葉に注目して、父→子、父・子→霊の発出関係を動的に捉えようと苦心していることの現われと見ることができるであろう。

八つの部会に分れて行われた分科会の報告については、そのごく一部に出席したにとどまるので、ここではその紹介は省略したい。日本からの15名の参加者のうち、有働、蓮見、長倉の諸教授および筆者が報告を行ったが、長倉氏の報告を司会したフランシスコ会神父が感激の面もちで報告を激賞していたことを付記しておく。

さきへのべたように、学会の主な会場はLNであったが、なか日の9月2日は参加者一同五台のバスに分乗して古いルーヴァンにむかい、LNとはうって代った古めかしい、由緒ある会場で行われた研究会やレセプションに臨んだ。市役所で行われた市長主催の歓迎会ではクリュクセン会長がフラマン語でルーヴァンの美しい町並、温い人情、そして味よきワインを讃えるスピーチを行う一幕もあった。また古いベギン修道院の外観はそのままだ、内部は大学関係の宿舍や集会所に改修された施設にも案内されたが、ヨーロッパの大学の歴史の重さというか、人々が大学に寄せる愛情の深さがまざまざと感じとられた。

9月3日の夕刻には総会が行われ、新しい会長にはハーバード大学のマードック教授（中世科学史）が選出された。国際中世哲学会の会長職がヨーロッパからアメリカに移ることについては色々議論もあり、理事会でも種々かけひきに類する動きがあったが、次回大会の開催地などの考慮もはたらいて、このような選択に落ち着いたようである。なお日本で学会を開催してもらいたいという希望をしばしば耳にしたが、その可能性は現実性からはかなり隔ったものであることを、その都度答えておいたことを付記しておきたい。（追記。昭和57年聖心女子大学で開催された中世哲学会において、中山教授の司会の下に小山、有働教授と筆者の3名で第7回国際中世哲学会に関する報告を行ったが、この記録は小山、有働両教授の了解を得て筆者がまとめたものである。）

稲垣良典

第4回国際アンセルムス学会

1982年7月11日から16日までの6日間、第4回国際アンセルムス学会が、フランス・ノルマンディー地方のル・ベック・ヘルウィンにあるベネディクト会修道院 Abbaye Notre-Dame du Bec-Hellouin において開催された。日本からは、当初、大村晴雄教授・泉治典教授が参加を予定されていたが、最終的には筆者のみ出席することになった。

会場となった修道院は、アンセルムスが33年間修道士・副院長・院長として過ごし、また、『モノロギオン』・『プロスロギオン』や「三部作」（『真理論』・『選択の自由』・『悪魔の墮落』）を著わした地である。特に今回は、「三部作」執筆後約900年に当ることを記念して、「三部作」をめぐる内容が主要テーマとして設定されていた。基本テーマは、《Etudes Anselmiennes. Les mutations socio-culturelles au tournant des X^e-XI^e siècles.》で、国際アンセルムス委員会後援のもとに C. N. R. S. (Centre national de la Recherche scientifique) が主催するという形を取った。

開会に際して、教皇ヨハネ・パウロⅡ世から電報が寄せられたことが報告された後、C. N. R. S. 研究主幹 R. Forville によって La place de saint Anselme dans l'his-